

「西湖の月」における中国人の身体表象 ——病の少女の身体を中心に

陳 玲

1. はじめに

谷崎潤一郎（1886—1965）の「西湖の月」は大正八年六月の『改造』に発表され（原題「青磁色の女」）、同年九月に改稿があり、『近代情痴集』に所収された。その後、更に改稿されて昭和二二年の『私』に収録された。この作品は、谷崎が前年（大正七年）の中国旅行中に訪れた杭州で目にしたと思われる風景を元に、ある一人の少女の死を描いている。先行論では、宮内淳子が「西湖の月」の改稿の過程における変化に注目しながら、月と水のある風景に焦点を絞って、小説の原題「青磁色の女」であったように、重要だと思われる「女」（麗小姐）について分析した。

しかし、小説の多くを占めている麗小姐以外の人物描写に関してはまだ見落とされている。西原大輔は谷崎のいくつかの作品（そのうち、「西湖の月」も含まれている）¹を取り上げて、これらの作品の中の中国は「日本人作家の憧憬の地」であり、これらの作品のなかで展開されているのは「幻想のオリエントとしての中国」だと述べている。²また、「中国」はどのように「幻想のオリエントとしての中国」に見られたのかについては詳述されていない。

本論では、「病」（肺結核）と関連して考察したいため、³「西湖の月」の各版の変化については扱わず、定稿を取り扱うことにする。作品における中国人の身体に注目し、⁴中国人の身体はどのように表象されるのか、特に肺結核に感染した少女の身体表象について分析することによって、少女の身体から性的豊かさの排除に注目して考察しながら、⁵「幻想のオリエントとしての中国」を解明する。また、先行研究で、この作品の多くを占めている風景描写について部分的な分析があったが、全体的に注目したものはない。風景描写を系統的に分析し、身体表象との関係についても考察したい。

2. 中国人の身体

この小説において、主人公と見なされる麗小姐が水底に沈んで自殺するという結末が設定されている。宮内淳子は小説の各版の変化に注目し、麗小姐の自殺について各版によって異なる見解を出している。例えば初稿では、⁶「小姐の死は証人もなく原因もわからない。それは水中の死に憧れた「私」が見た夢想とも解釈できる」と宮内淳子は述べている。それに対し、第二稿については、⁷「自殺の原因が示されることで、小姐の死は「私」の閉ざされた夢想ではあり得なくな」り、「夭折の美女を慕う普遍的な感情に至る道が示された」と述べられている。宮内は初稿（自殺原因がわからない）から第二稿（原因が示される）への変化に注目して解釈したが、自殺の原因である麗小姐の「肺結核」の治癒に対するあきらめについては論じられていない。

本論では、定稿を使用し、作中に登場する人物の身体を比較する。麗小姐を病の少女として定義し、描かれる彼女の身体を中心に分析しつつ、彼女の死の意味を検討していきたい。では、最初に男性の身体について分析してみよう。

2.1 否定された中国人男性の身体

「私」が西湖へ向かう列車の中で、隣に坐っているのは「象牙のパイプで紙巻のウエストミンスタアを燻ゆらしていた男」で、「尫大に肥満した顔の中にある脹れぼったい眼を慵げに睜」いている。「不愛想な眼つきでじろりと私に一瞥をくれ」、「人と話をするのが如何にも大儀だと云う風に見える」のである。この人は「私」によって、「商人」だと想像される。つまり、「象牙のパイプ」、「肥満」、「不愛想」という要素が「私」にとっての商人の特徴的なイメージを作る。満員列車の中で、「でっぷりして大柄な体」を持ち、傍若無人に煙草を吸っている不親切な男がここに描かれている。

この傍若無人さは「商人」に限られているのではなく、他の男性の乗客にも見られる。「私」の向い側に坐っている「亭主」が「茶を飲んで煙草を吸い、煙草を吸ってはカーアッと喉を鳴らして床の上へ痰を吐き散らす」のである。それから、「又ぺちゃくちゃと話が始まる」のである。「亭主」は「身動きもならない」列車の中で、煙草を吸うだけではなく、痰も吐く。いかにも自然で、正当な行動であるように。それから、またおしゃべりに戻る。ここには、傍若無人さだけではなく、公共衛生を意識せず、他人の健康を無視する男が描かれている。

さらに、「品の好い身なりの連中」もまた、「人前を恥じる様子もなく夢中になって大声を出したり銭の取り遣りをやって居」て、「誰も何とも云う者はない」のである。この男たちはあらゆる場所をその賭博場として使い、公然と「中国のデカダンの標本」として振舞っている。

このように中国人男性の、傍若無人さ、公共衛生についての意識の欠如、賭博に夢中する退廃的な様子が鮮烈に描かれており、否定的に捉えられている。これらの描写には、「私」のこれら男性たちの振舞いに対する嫌悪感がうかがえる。それでは、なぜ「私」は中国人男性について否定的に見ているのであろうか。「私」はすべての男性に対して嫌悪を示すわけではない。小説の後半に登場する「姉の婦人の亭主」である男性は「面長な、背のひよろ長い痩せた紳士」として描かれており、「私」の嫌悪とは無縁であった。つまり、小説の最初に描かれている「南国」の美しい風景が示唆したように、「私」が期待するのは現実から遠く離れた「お伽噺」のような国であって、西原大輔が指摘している「醜悪な近代に侵食されることなく、エキゾチックな美が保存された」⁸ 国ということである。「中国人のいろいろ風俗を観察する」立場に立つ「私」に対して、列車の中の中国人男性たちは景色のように、見る対象として観察される立場に立たされる。そういうわけで、期待される中国のイメージの範疇にとどまらなかった人物や風景が登場する場合、「私」は明らかに嫌悪を示す。続けて「座席の半分以上を占めて居る婦人や小児」を見ていこう。

2.2 性的身体から遠ざけられる女性

南（江蘇浙江あたり）の列車の中では、「婦人の乗客が多い」というのが顕著な現象である。「夫人」ばかりではなく、「令嬢」も多く見られる。まず「令嬢」はどのように表象されているのかを見てみよう。

「私」と同じテーブルに向かい合っている乗客の中に、二人の娘がいる。十八九歳のほうは「黄疸のような血の気の失せた顔色」をする「女」だが、「目鼻立ちは木彫りの如く堅くキッチリと整って居」る。十五六歳の「娘」のほうは姉と正反対に「ふっくらとした樽柿のような色つやをした圓顔」で、「優雅に見える」ている。姉妹であるが、姉は「黄疸のような」蒼白な顔色で、芸術品のように目鼻立ちはキッチリしている。この顔貌の描写から彼女の身体の華奢さも想像できるであろう。妹は正反対で、顔色の健康さは「樽柿」という比喩で表象され、形も「圓顔」で、優雅に見える。二人の娘は対照的に描かれてい

るが、その描写は顔か上半身のみ集中していることから、性的身体との無縁さが共通に見られるであろう。

「私」の近くにいる娘たちのほかに、少し離れているところにもう一人の「令嬢風の女」とその兄嫁の「奥さん」がいる。この列車での乗客の色彩は非常に華やかで、婦人たちの衣裳は派手であるため、彼女たちは「金魚」と形容されている。その「毒々しく燃え立つような衣裳の中」に、「令嬢風の女」だけは「一人瀟洒とした薄い青磁色の上衣を着けて、白襦子の靴を穿いて居る」のである。彼女の向い側に「浅黒い圓顔」で、「妙な媚と愛嬌とが目元と口元に漂うて居る」奥さんがいる。ここでの描写も相変わらず人物の服装と上半身、あるいは指に集中している。兄嫁は既婚女性であり、成熟した性的身体を持っていると想定されるが、それはただ「妙な媚と愛嬌とが目元と口元に漂うて居る」と曖昧に描写されている。「少女」と「奥さん」の区別も女性の身体的な特徴からではなく、「奥さん」の「髪のかき方」から判断されるのである。

更に後の場面でも言及されるのが、中国の女性は「凡べて小柄で童顔なのが多い」から、年齢を当てるのが難しいということだ。「此の令嬢」はもし髪を「娘風」に結っていなかったら、「彫刻的な均斉を持った立派な容貌」のために、実際よりずっと「大人」に見られるのであろう。つまり、成熟した性的身体を持っていると想定される既婚婦人と未婚の少女との境界線は中国人女性において非常に曖昧で、明確に区別できないわけである。兄嫁は「相当の美人」として形容されながら、成熟した身体といった豊かさには言及されていない。

「令嬢」についての描写は服装のほか、その美しさは眼や鼻に集約されており、「すっきりと華奢な姿と見える」のである。彼女の手指は同じ東洋の日本人女性の指よりも「一層デリケート」で、「繊細を極めて」おり、皮膚は「やゝ卵黄色を帯びた冷たい青白い色をして居る」。このように、「令嬢」は「すっきり」、「華奢」、「繊細」、「冷たい青白い」といった言葉で語られ、性的身体を持たない少女として描かれている。とりわけ「冷たい青白」さは彼女の「肺結核」の病状を表し、彼女を一層性的身体から遠ざける。全身に現われている「病的な美」のため、彼女は「真の東洋的——中国式美人の典型」として表象されている。

スーザン・ソントグはこの病（肺結核）について、それは「人を霊化する、繊細な病気」⁹であったと述べている。死の床にある結核患者も「より美しく、より霊的なもの」¹⁰として描かれていたのである。「令嬢」の病（肺結核）の身

体も美化される。病の身体を持つ美は、病の身体そのものの美ではない。病になることによって引き出され、可視化される美である。また、福田真人も「甘美でロマンティックなイメージ」というのは、「肺病に特権的なもの」¹¹であると述べている。では、「西湖の月」における病の身体に美を読み取った場合、それはどのような美しさであろうか。それは「私」によって明確にされている。それは「神韻縹渺」という「弱々し」さである。そして、それは「真の東洋」＝中国の美人の典型だと「私」は考えている。「私」は見る対象となる病の少女の身体から、性的乏しさと「美しさ」を両方読み取っている。他の女性と比較してみれば、「華奢」である病の少女は一層性的身体と無縁であるように見られる。しかし、「私」にとっての「真の東洋」の美は豊かな性的身体ではなく、「縹渺」な「神韻」という抽象的な要素で決定されるゆえに、性的身体と無縁であるからこそ、「縹渺」な「神韻」を引き出しうるのだ。さらに、2.1で「私」の想像した枠組から引き出された、否定的に描写される中国人男性と比較すれば、中国人女性、とりわけ病の少女の美は一層際だって、私の目に映したのであろう。また、西原大輔の指摘しているように、谷崎は中国を「変化のない社会」と見なし、中国文化を「静的なもの」と認識したため、中国人女性は「風景の一部として一方的に鑑賞される存在」であって、「生きた対話の相手」ではなかった。¹²このように、中国人女性は「私」の想像した枠組の中にとどめられたわけである。

3. 中国の風景

以上は登場人物の身体の描写について分析した。次は作中において紙幅を多く占めている中国の風景の描写について分析していきたい。小説の中で、北（河南）の風景、南（江蘇浙江あたり）の風景及び西湖の風景についての描写が見られるが、南と西湖の風景を中心に描かれている。では、この三者の風景描写を比較しながら見てみよう。

3.1 北/南—「雲泥の相違」

「私」の言葉を使うと、中国南北の風景は「雲泥の相違」である。秋の末の北は「蕭殺たる原野」として表象される。ここで、晩秋の北の草木が枯れ、風物が荒れ果てて、もの寂しい広々としたさまが描かれている。それに対して、江南を走る汽車の窓外に「連なって居る豊饒な田園の趣」は「私」の夢を自然

に「詩の世界に迷い込んで行くような心地」にする。生き生きとした南の風景が描写されるだけでなく、王漁洋の詩の世界、李笠翁の詩劇の世界と結びつけられる。十種曲の中にある蜃中楼伝奇については、その“ローマンス”の舞台となった東海という場所は広く、具体的にどこにあるのか明言されていないが、中国の南すなわち江蘇浙江あたりの海岸だと「私」は想定する。そう想定することによって、「私」にとって南は一層「お伽噺」のような場所になったであろう。「南へ／＼と行くに従って支那はだん／＼美しくなる」と「私」は言う。さらに、南方の乗客は北方の乗客より華やかである上、女性の乗客も多い。例えば、江南を走る汽車の二等室の客は、北方なら一等室でなければ出会わないような立派な服装をしており、土曜日でも二等室が混雑するため、江南地方の中流階級は「景気がいい」と「私」は考えているのである。北方では女性の外出は稀であることに対して、江南地方では、「歌妓」はもちろん「夫人」でも「令嬢」でも男性と手を携えて盛んに遊び歩いているのである。以上のように、北より南のほうが裕福であり、美しく、「豊饒な田園の趣」がある詩の世界、日常の山水・楼閣・人物は「お伽噺」のようで、南の世界は非現実な世界として表象される。また、鉄道沿線の風景は鮮やかで、色彩がはっきりしているため、注目を集める。ここで、明らかに北の風景より南の田園風の風景が「私」に好まれ、南に対する「私」の愛着が容易に読みとれるであろう。

3.2 西湖——幻の世界

色彩に乏しい北の「蕭殺たる原野」は、「田園」風である南の彩り及びその繁栄ぶりを一層際立たせた。では、南にある西湖はどのように描写されるだろうか。

西湖が「私」に与えた最初のイメージは「縹渺」であった。湖の彼方にある呉山の山影は、空の色よりすこし濃い程度で、靄のように棚引いている。月は冴え返っているが、有名な雷峰塔はやはり夜霧に隠れており、はっきり見えない。その後、「私」は画舫に頼んで、湖に出た。その夜も依然として明月が大空に掛かっている。「蒼茫」とした湖面と周りの優しい姿をした山や丘陵と極めて適度な調和を保っており、変化に富んでいながらも一枚の絵を広げたように全てが同時に目に入ってくる。湖面に目を向けると、船が水の上ではなく、「私」は「水の底に沈みつつあるような心地」がしながら、身を水の底へ沈ませることができるのならば、溺れて死ぬのも苦しくないし、身を投げるのも悲

しくないときえ思った。その際、空気の世界と水の世界は区別できなくなるほど、水は「霊泉のように透き徹って」いた。3.1 で分析した色彩に富んでいる水彩画のような南の風景と比べてみれば、西湖の風景は淡雅で、あっさりしており、色彩に乏しい中国の山水画のように描かれている。生き生きしているというよりも、非常に静かな水の世界である。その水はあまりにも透き通っているため、空気の世界と水の世界が混同されてしまうようになる。その際、「私」は死を忘れ、自分の身が水の底へ沈んでいくときえ考えていた。ここでの西湖は人間の世界ではなく、夢の世界のような異空間である。さらに北の「蕭殺たる」風景と比べてみれば、幻の世界である西湖の神韻は一層際立ったことであらう。

4. 少女の処女性を封印する西湖

以上、人物と風景の描写について分析してきた。一見すれば、風景の描写は物語の進展に無関係に見えるかもしれないが、それを病の少女の姿と合わせて描くことにより、風景が彼女を一層芸術品のように美しく見せると思われる。次に、それについて分析していきたい。

2.2 で少々言及したように、極めて派手な衣装の中に、病の少女だけが「瀟洒とした青磁色」の上着を着て、「金魚の中に変り色の緋鯉が一尾交ったようなすが／＼しい感じ」を「私」に与えたのである。また、ホテルで「私」が再び少女を見かけた時、絹のような西湖の水と爽やかな秋の朝の外気の影響によって、彼女の美しさは一層浮き立つように見える。更に、病のため、彼女の肌が「玉のような冷え／＼とした堅さ」を持ち、この風情が以前にもまして「私」の心を惹いた。しかし、如何に「私」が少女の魅力に魅了されても、彼女は相変わらず成熟した性的身体と無縁であるように描かれている。小説に登場してある西洋人の女性と比べてみれば、更に明瞭だと思われる。その人物は荒い弁慶縞の羅紗の上着を「どてらのようにだぶ／＼」に着込んでいて、「太った」女性であった。「私」は彼女の前を通りかかる時、突然彼女に話しかけられた。

「あなたは東京から来ましたか。」

「いや、東京からではない、北京から来たんです。あなたは東京に居たことがあるのですか。」

「え、東京にも、大阪にも、コオビ（神戸）にも居ました。そして日本語を少し覚えました。」

以上のごく簡単な会話だけで、「私」は彼女のことを「きっと上海あたりから張りに来た淫売だろう」と思った。実際は、彼女は旦那と一緒にきたのであり、売春婦ではなかった。では、なぜ「私」は彼女のことを売春婦だと思い込んだのだろうか。会話の内容はごく普通で、特に彼女が売春婦である根拠になるところは見られない。従って、「私」は彼女の外見から判断した可能性が強い。「だぶ／＼に着込んで居る」様子、また、「太った」豊かな身体が売春婦のように濃厚な性的魅力と結び付けられたのではなかろうか。少なくとも、「私」にとって成熟した性的身体の持主は、豊かな身体を持つ女性だと言えよう。

しかし、病の少女については、その「すっきりとして居る」脛と足、「華奢」である手頸、「鹿の脚のような、優雅な楚々とした感じ」の両脚の線、身体に関するどの描写も「私」にとっての豊かな性的身体と背馳している。それに加え、「希臘風」の秀でた鼻と「小さく切れた肉の厚い」唇を持った少女の顔は、「子供らしいぼんやりさ」を備えている。とすれば、少女は性的身体を持たない子供として描かれているのであろうか。2.2 ですでに分析したように、病は更に彼女の女としての性的豊かさを希薄にしていながらも、全身に現われている「病的な美」のため、彼女は「真の東洋的——中国式美人の典型」にされている。「彫刻的な均斉を持った立派な容貌」のため、彼女は実際よりずっと大人に見られる。語り手は見る対象となる病の少女の身体から、性的乏しさと大人の「美しさ」を両方読み取っているのである。生き生きとした生命力のある人間よりも、病のため美化され、同時に性的豊かさを脱色した優美な芸術品のように描かれている彼女には妹娘のような「樽柿のような色つや」、つまり健康な美は見られない。性的身体を持たず、かつ子供でもないことで、性的身体と無縁の大人（処女）の「美しさ」は病によって賦与されると同時に、病によって保存されているのだ。

ところが、少女は芸術品のように描かれていても、生命を持たない芸術品ではない。病の進行によって、衰えて行くか、完治によってその「病的な美」を失ってしまう存在である。彼女の格好と姿が西湖の風光の画面とふさわしいと見ている語り手が暗示したように、「神韻縹渺」で、病の大人風の少女は、西湖の「縹渺」な風景と一体化されていると言えよう。宮内淳子は月と水がある風景は「特殊な時空」と述べ、水の底に沈むという「私」の憧れる死は「生命の休息」であるからこそ「痛みや自我喪失の恐怖がない」と指摘している。¹³

少女が西湖に浮かんでいるシーンを見てみれば、より一層明瞭になると思われる。死んだ少女は「安らかに」体を横にしており、彼女の表情に「微塵も苦悶の痕を留めて」いない。顔は「穏やかに且生々しく輝いて」いる。「彫刻的で堅過ぎる憾みがあった」鼻の輪郭は濡れて浸っているために却って「人間らしい柔かみ」を持つようになり、青かった血色も「垢を洗い落としたように白く冴え返って」いるのである。

以上のように、少女の死は「安らか」で苦痛のないように描かれており、生きていた時の美しさも全く失っていない。「病的な美」、つまり病と美の最高の結合、また人景合一の融合を保つため、少女は幻の世界である異空間の西湖の水の中で死ななければならなかった。病の少女を媒体として表現される、「私」にとっての終極の美、完璧な中国の美が死という手段でようやく実現された。性的身体から遠ざけられる中国女性の美も少女の処女（未婚）であるままで死ぬという形で表現された。そして、「私」の思った理想的な美＝真の東洋の美も少女の死によって実現された。

5. 終わりに

作中の人物と風景の描写は一見すれば、二つの並列した線で進行すると思われる。すなわち、男—健康な少女—病の少女/北—南—西湖の系列である。以上で分析したように、これらは、無関係ではなかった。「私」の想像した枠組から弾き出された、否定的に見られる中国人男性は女性（少女）の美しさを一層際立たせており、健康な少女の美は病の少女の「神韻」を一層際立たせている。色彩に乏しい北の風景は南の彩り及びその繁栄ぶりを一層際立たせると同時に、幻の世界である西湖の神韻をも一層際立たせている。「私」は中国の風景を楽しんでいると同時に、中国の女性をも見る対象として鑑賞している。西原大輔は近代の日本人にとって、中国は「古代が冷凍保存された国」であり、「古代のロマンを感じることのできる老大国」¹⁴と指摘しており、谷崎にとって、中国人の女性は「風景の一部として一方的に鑑賞される存在」¹⁵であると述べている。

「私」によって描かれている大人の女は「血の気の失せた顔色」を持っており、病的な（健康でない）女性である。また、「華奢」で、「玉のような冷え／＼とした堅さを持つ」っており、「彫刻的」である。永栄啓伸は、谷崎が他作品でも同様に「彫刻」という言葉に永遠不変のイメージを託していたことを指摘している。¹⁶

「病的な美」を持つ「真の東洋」美人の「美」を永遠に保持するため、つまり、「醜悪な近代に侵食されることなく、エキゾティックな美」¹⁷を永遠に保持するため、病の少女は死ななければならない。小説における湖（水）は、死の世界となり、それは同時に時間を止める場所となる。病の少女の美は「彫刻的」に留まらず、死によって永遠不変に保たれる。西湖も病の侵食、つまり「変化」を止め、少女の「美」と少女の処女性を凍結する場所となるのだ。

注

- 1 いくつかの作品を具体的に言えば、小説の「西湖の月」、「鮫人」、旅行記の「朝鮮雜観」、「蘇州紀行」、「東京をおもう」である。西原大輔『谷崎潤一郎とオリエンタリズム』（中央公論新社、2003年）130頁－132頁を参照した。「西湖の月」については、西原は定稿を収めた中央公論社『谷崎潤一郎全集』（1981－83）を使用した。
- 2 西原大輔、前掲書、132頁を参照した。
- 3 宮内淳子の論文によると、初稿において、「小姐」の死は証人もなく原因もわからない。それに対し、第二稿と定稿では、自殺の原因（肺結核の治癒にあきらめたため）が示されている。本論文では、また変更される第二稿と比べて、最終版としての定稿を使用する。宮内淳子「「西湖の月」の改稿をめぐって——谷崎文学の一軌跡——」『国語と国文学』62（1985）、66頁。
- 4 ここの「作品」は宮内淳子の述べている「定稿」を指している。本論における作品からの引用もすべて「定稿」からの引用になる。宮内は昭和二二年三月発行の全国書房『私』に収録された「西湖の月」を定稿とする。前掲論文、56頁。
- 5 本論文の4の部分において、「私」にとって成熟した性的身体の持主は、「豊かな身体を持つ女性」だと分析した。本論文における「性的身体」、「性的豊かさ」などの表現は、具体的に言えば、「豊かな身体」、性的な魅力（刺激）のある身体、十分な性的な魅力があることという意味で用いる。
- 6 宮内淳子は大正八年六月『改造』に発表された「青磁色の女」と題するものを初稿とする。前掲論文、56頁。
- 7 宮内淳子は大正八年九月八日発行の新潮社『近代情痴集』に収録された「西湖の月」と改題するものを第二稿とする。前掲論文、56頁。
- 8 西原大輔、前掲書、135頁。
- 9 スーザン・ソントグ『隠喩としての病い エイズとその隠喩』富山太佳夫訳（みすず書房、1992）、23頁。
- 10 スーザン・ソントグ、前掲書、24頁。
- 11 福田真人『結核の文化史』（名古屋大学出版社、1995）、176頁。
- 12 西原大輔、前掲書、137頁を参照した。
- 13 宮内淳子、前掲論文、59頁を参照した。
- 14 西原大輔、前掲書、16頁。

15 西原大輔、前掲書、137 頁。

16 それと似ている描写が「呪はれた戯曲」の中でも見られる。永栄啓伸『評伝 谷崎潤一郎』（和泉書院、1997）、68 頁。

17 同注 8。